登場人物

喜多嶋翔 (きたじま・しょう)

青山麻衣 (あおやま・まい)

再び悠太の前に現れる。

石打悠太(いしうち・ゆうた)25歳、主人公、

商店街の再生やまちおこしプロジェクトを手が

けるベンチャー企業、西朱雀プロジェクトの社

員。入社2年目で四国・伊予南市に赴任する。

25歳、西朱雀プロジェクト社員。 悠太の1年先輩。

24歳、悠太の元カノ。悠太をふっておきながら、

松島秀人(まつしま・ひでと)34歳、「パン

焼き工房・まつしま」オーナーシェフ。東京で

広岡卓次(ひろおか・たくじ) 49歳、地域おこし協力隊員として東京から伊予 南市に移住したが……。 新庄誠人(しんじょう・まこと) 39歳、伊予南市役所·地域振興課長。 ショーン・次川(つぎかわ) 45歳、アメリカ

の投資ファンド、ヴィンセント・ファンド副社長。 花咲かえで(はなさき・かえで)24歳、西朱 雀プロジェクト社員、悠太の1年先輩。 大渡晴美 (おおわたり・はるみ) 45歳、伊予南市長。大渡薫子の母。

んです」 み合わせかもしれませんね」 ビワを加えるんですね。 「このデザー 「アイスクリ ム入り

修行し故郷の伊予南市にベーカリーレストラン

三十分後、

を開く。

これいけるかも!」 · ツ、 作れるかもしれ

なるほど、

「味付けを変えて何種類か作ってみます。 松島は瓶を受け取った。

松島は深皿を九つトレーに乗

せてテーブルに運んできた

たんです。 置いた。三人は同時にスプーンでビワとタ ですが、味を微妙に変えて三種類作ってみ にシナモンを加えてみました」 「タピオカミルクにビワを入れたのは一緒 松島が悠太、麻衣、喜多嶋の前に深皿を まずこちらはココナッツミルク

入れた。 嶋がうなずいた。 !」と麻衣が言い、 悠太と喜多

ピオカ、ココナッツミルクをすくい、

ロに

ンを加えてみました。レモンココナッツミ 「続いてこちらはココナッツミルクにレモ

思わず笑みを浮かべた。 感が混然一体となって舌を喜ばす。悠太は 広がり、タピオカの粒とビワの柔らかな食 ルクが好きな人は多いですよね」 爽やかな甘みとほのかな酸味が口の中に 三人が同時にスプーンを口に運んだ。

を入れた瓶を見せた。 「伊予南特産のスイ テーブルにやってきた松島に麻衣はビワ シェフ、 お願いがあるんです」

言った。 皆さんのお腹、 「やってみましょう」 「作っていただけますか?」 悠太たち三人は同時に「大丈夫です」と

> バッテリー移転阻止の策を新庄に指示する。シェフに相談するが……。大渡市長は二名島 悠太は、小笠原一徹から「ビワのコンポ・前回までのあらすじ れ、「パン焼き工房・まつしま」のオ を全部売り切ったら協力してやるよ」とい ゎ

まちおこし特命社員 石打悠太

馬

定

者を

第十五回 悠太、「馬鹿者」の片鱗を見せ始める その一 渋谷和宏

衣を悠太と喜多嶋はまじまじと見つめた。 しかしたら、 さっきより甲高い声を出した麻

トにビワを入れたらと思った まだ入りますか?」 のタピオカミルクに 良い組

たりして……そうだ! 街を盛り立てたりしてきたんでしょう? を考えてあげなさいよ」 「それはイベントとかキャンペーンを催し 「頼りない返事ね。悠太たち、 このお店の知名度を上げるアイデア どんな手を打ったの?」 ここでイベント 地域の商店

「すっきりと言うのとはちょっと違うと思

まあいいか」

-を開くのはどうでしょう?」

っきり感があるよね」

「そうね、

俺も二人と一緒かな。

レモンの

そういう時、

喜多嶋は自分を指さした。

V

美味しかったです」

悠太は松島に言った。

「僕はレモンココナッ

ツミ

Jν

クが

~いちばん

「そうならいいのですが」

喜多嶋が言った。

「僕も絶対にいけると思います」

松島は弱気な表情を浮かべた。

悠太も喜多嶋に同調したが、松島はゆっ

っている。

「いかがです

か

トの酸味がビワやタピオカにとてもよく合

ですか?」

悠太は間髪入れず一口食べた。

ヨーグル

メニューに加えたら売れるんじゃない

「シェフ、

このすっきりレモン味のデザ

にビワとタピオカパ

ルをひたしてみまし

たのを思い出した。

はなくて飲むタイプのプレーンヨーグルト

「最後がこちらです。

ココナッツミルクで

の無駄にデカいのは美味しいものを表現す

悠太は、花咲かえでがいつだったか「あ

麻衣が釈然としない顔をした。

る能力に決定的に欠けているの」と言って

喜多嶋が感極まった声を出し、

麻衣もう

ナモンの自己主張が少し強い感じがして、

「シナモン入りも美味しかったですが、

シ

くりかぶりを振った。

「うちの店、

まだまだ全然知られていなく

ビワの風味とぶつかり合っているように思

えました」

「あたしも同じだわ」

ています」

「悠太、あなたまちおこし特命社員でしょ

もっと知名度を上げなければと切実に思っ

お客様の数が絶対的に少ないんです。

麻衣が言う。

「自己主張という点ではヨーグ

ルトも一緒

ビワの存在感を薄めてしまって

いる気

喜多嶋さんはどう?」

「そうだね……」

大正大学地域構想研究所ホームページ(http://chikouken.jp/chiikijin)では、 連載小説「『馬鹿者』を命ず!」のバックナンバーを閲覧できます。

席をこしらえて、夕暮れや星空を見ながら のイベントとかパーティーを企画したら」 の景色は本当に素晴らしいですよね。庭に 「どんなイベントだよ? 何のパーティー 「松島さんのつくる料理はとても美味しい お店の雰囲気はいいし、それに庭から

喜多嶋が口を挟んだ。

「婚活パーティーとか」

「未婚の男女がこの街にどのぐらいいるん

「それなら映画上映会とか」

「アホか!」

ないかと思ったことがあるんです」 「実は私もパーティーとか宴会を企画でき

な不便な場所に大人数が集まったりしてく や夜景をぜひ見てもらいたくて。でもこん れませんよね」 「石打さんが言われたようにここの夕暮れ 松島が言った。

「送迎バスを使うのはどうかしら」 麻衣が言った。

企画なら成り立つのか考えてみます。それ 面白いと思うわ。シェフ、あたし、どんな から告知用のホームページのデザインも作 ってみるわ。ここに集まりたい人たちが本 「イベントとかパーティ ーとか、あたしも

> 当にいたら、その時、ビワとタピオカパー 「麻衣、ホームページなんか作れるの?」 悠太の質問に麻衣は「当たり前じゃない」 トを出したらいいと思います」

と口を尖らせた。

いるんでしょう?」 色を見てみたいわ。絶景ポイント、知って きたのよ。ねえ悠太、あたしも庭からの景 「あたし、会社ではその仕事をずっとして

らった場所に麻衣と喜多嶋を案内した。店 の裏手の高台だ。 店を出た悠太は以前、松島に案内しても

声を上げた。 悠太が指差す方向を見下ろした麻衣は歓

だろう。眼下に広がる伊予南市の変化に富 しく感じられた。 んだ風景は初めて見たときよりもさらに美 悠太も息を呑んだ。緑が濃くなったから

緑を湛えている。 街地にかけて広がる田園も今では鮮やかな いほどに輝き、森が途切れるあたりから市 山々のこんもりした緑は日を浴びて眩し

「確かにすげえな」 喜多嶋が唸った。

「ここで飯食ったら絶対に美味いよな」

生ビールを飲みほした広岡卓次は店員に

んだ。 きたカツオの刺身の皿を取り、口に放り込 おかわりを頼み、ちょうど目の前に回って

も何だか水っぽい。 つだった。味が薄く、旨みに乏しい。食感 見た目は新鮮で美味しそうだったが今一

っけ。昔はそれなりに美味しいと思ったも 回転ずしの刺身なんてこんなものだった

口飲み、穴子の握りと甘海老の皿を取って、 一貫ずつ食べた。 店員から生ビールを受け取った広岡は一

がまったく感じられない 有の風味に欠けるし、甘海老の握りも甘み 握りは甘辛いたれの味ばかりがして穴子特 この店が他店に比べて不味いのだろうか どちらも美味しいとは言えない。穴子の

は来ないはずだ。 とはいえ、不味い店だったらこれだけの客 いくら大阪駅に近い北新地の繁華街にある まだ早いのに席はほとんど埋まっている。 そうだ。時刻は午後四時五十分で夕食には 店内の様子からすると決してそうではなさ

った。いつの間にかそれに慣らされてしま れまで食べてきた物よりはるかに美味しか た魚介類はどれも新鮮かつ豊潤な味で、こ あり得ないことではない。伊予南市で食べ やはり口がおごってしまったのだろうか

たのだろう。

の自然や風土にも体が馴染んでしまったら 食べ物だけではない。どうやら伊予南市

立てる庭の木々を思い出しているのだ。 ビや、風に吹かれざわざわと葉ずれの音を 歩いている時でも、ふと気がつくと群青色 の海に浮かぶ白い波頭や、空高く舞うトン の車内でも、バスを降りてJR大阪駅前を それが証拠に四国から大阪に向かうバス

ダの軍艦巻きと卵焼きの握りを口に放り込 んだ広岡は勘定を払い、店を出た。 二杯目の生ビールを飲みほし、カニサラ

路を走る車や信号の音とともに眼前に迫っ で賑わう繁華街の極彩色の光景が、幹線道 勤め人や買い物客や海外からの観光客ら 広岡は目をしばたいた。

人たちにぶつからないように慎重に歩き出 立ち止まって深呼吸してから、行き交う

岡は思った。 カプセルホテルにチェックインしようと広 このままとっとと地下鉄梅田駅前にある

駅前のガード下にある新梅田食道街で串カ のだが、そんな気持ちはもうすっかり萎え ツでも食べながら一杯飲もうと思っていた てしまっていた。 久しぶりに都会に出てきたので JR大阪

> いのだ。 理由は分かっていた。伊予南市が懐かし

ないのだ。 からの風景、まちおこしのために奔走した 伊予南市での生活、山の中腹にある自宅 - それらが今、愛おしくて仕方が

「おっちゃん、気いつけな!」 大阪弁で声をかけられ、広岡は我に返っ

た。

信号で横断歩道を渡ろうとしていたのだ。 みしめた。 広岡は苦笑した。同時に意外な思いを噛 伊予南市の風景を思い浮かべながら、赤

のに……。 別れた妻の面影がまったくちらつかない 一時期はあいつのことばかり考えていた

がちらほらと灯り始めていた。 市街地に戻って来た時、日は落ちて街路灯 悠太と麻衣、喜多嶋の三人が伊予南市の

開けたのと同時に悠太に声をかけた。 助手席で眠そうにしていた喜多嶋が目を

「どうする?」

「車ですよ」 「どこかで一杯やっていくか?」

「お前は飲まずに俺たち二人が飲むんだ

「あたしも飲まないわ。パン焼き工房・ま

ザインも検討してみたいの」 けるか考えてみたいし、ホームページのデ つしまでどんなイベントやパーティーを開

げようと思ったのに」 「ああ、そうですか。残念だな。祝杯を挙

「祝杯って、なんの祝杯ですか?」 喜多嶋がつまらなそうな声を出した。

「ビワのデザートが出来上がった。一軒と 悠太が聞いた。

はいえ、西朱雀商店街での伊予南フェアの イベントに協力してくれる生産者がいた」 「確かにそうですね」

悠太はうなずいた。

のだった。 に向かい、合わせて四軒の生産者を訪ねた としきり庭からの風景を眺めた後、悠太た ち三人は再び生産者が集積する日下部地区 パン焼き工房・まつしまの店を出て、ひ

フェアに出してもいいと約束してくれたの く断られたが、一軒が夏みかんのゼリーを うち一軒は留守で、二軒からはにべもな

を買って事務所兼社宅で一緒に祝杯挙げま 嶋さん、コンビニに立ち寄って酒や食べ物 しょうよ」 「そういうことなら僕も飲もうかな。 喜多

盛り上がらないしな」 「そうするか。居酒屋で独り酒を飲んで

> 石打悠太 **馬鹿者を**

は缶ビールや総菜を入れたコンビニの袋を 事務所兼社宅の庭にラパンを停めた悠太 喜多嶋の機嫌がとたんに良くなった。 車を下りた。

隅を人影がよぎった。 冠木門の扉を閉めようとした時、 視界の

悠太はそちらを振り向いた。

嫌がらせをしにやってきたのだろうか。悠 太に「出ていけ」という書き置きを残した ずらし、駅の方へと足早に歩き出す。 電柱の陰に立っていた男が慌てて視線を もしかして、地域振興課の亀田太がまた か、玄関の扉や車に赤いペンキをま

分が決まるまで自宅謹慎を命じられていた 警察に事情を聞かれた後、市役所での処 き散らした男だ。

悠太はコンビニの袋を地面に置き、 男の

を速め、やがて駆け足になった。 男は悠太の気配を察したらしく、 、足取り

ない。だとするといったい何者だろう? のを諦めた。亀田ではなかったのかもしれ 悠太は男の敏捷な身のこなしを見て追う

った顔で悠太を出迎えた。 「なにやっているんだよ」 喜多嶋が玄関の上がりかまちに立ち苛立

「さっさと祝杯を挙げようぜ。一杯カアー

いてもらいたいんだけれど」 「その前にちょっと二人にあたしの話を聞 と飲んでスカーッとしたいんだよ」 麻衣が事務所から顔を出した。

「結婚式、どうかしら?」

悠太と喜多嶋が同時に聞いた。

験も組み合わせたりして。あのロケーショ 婚活パーティ 挙げて、店内で披露宴を開くのよ。素敵だ 話に決まっているじゃない。庭で結婚式を をかけてみようと思うの」 ンを売り物にしていろんなイベントの募集 と思わない? それから悠太が言っていた 「パン焼き工房・まつしまでのイベントの もありだと思うわ。農業体

「やってみなければわからないじゃない。 「応募する人なんているかな」

あたし、 のよ なんだか急にやる気が湧いてきた

麻衣は嬉しそうに笑った。

阪駅前の通りを、 新庄誠人は、高層ビルが建ち並ぶJR大 ビルへと車を走らせた。 ひときわ高くそびえるタ

のヴィッツを停めた新庄は、案内表示を頼 ベンツS550クーペの間に伊予南市役所 を下り、BMW·M2クーペとメルセデス・ 地下駐車場へと続くらせん状のスロープ

> に入り込んだみたいだ。 な木のクロゼット……何だか非日常の空間 で写真や映画で見た西洋の洋館そのものだ うエレベーターに乗り一階に上がった。 りにリッツ・カールトン大阪の玄関へ向か った。控えめなシャンデリアの照明や重厚 リッツ・カールトン大阪のロビーはまる

へと向かった。 新庄はロビーフロアの奥にあるラウンジ

ア系の一人客はその男だけだ ワインを飲んでいる。日本人も含めてアジ 着た三十代後半の男がすかしたしぐさで白 奥のテーブルでピンストライプのスーツを 目当ての男はすぐに見当がついた。一番

次川に違いないとあたりをつけラウンジに 入っていった。 インセント・ファンドの副社長、ショーン・ 新庄は彼がアメリカの投資ファンド、

身構えるように両腕をソファのひじ掛けに 男は新庄に気づいたらしく顔を引き締め

「次川さんですね」

し出した。 警戒を顔に浮かべた男に新庄は名刺を差

「本当に四国からやってきたのか」

「善は急げといいますからね」

かいのソファに腰を下ろした。 新庄は次川に勧められるのを待たずに向

算段をしてほしい」と大渡晴美市長から指 買収担当者を紹介してほしい」と単刀直入 社に電話を入れ、「二名島バッテリー株の 示を受けた。すぐに正面玄関から突入して 名島バッテリーの株を伊予南市が買い取る の担当者に接触し、ファンドが取得した二 みようとヴィンセント・ファンドの日本支 新庄は今朝、「ヴィンセント・ファンド

でいた。 「どんなご用件ですか」 電話口に出た相手の声には警戒心が滲ん

話ではないと思いますよ」 ことがあるんです。あなた方にとって悪い 「二名島バッテリーの株の件で相談したい

話口に出てこう言った。 相手はしばらく電話を保留にし、再び電

「担当者から電話させますから、あなたの

に申し入れたのだった。

お電話番号を教えていただけますか」

が連絡してきたのだった。 二時間後、地域振興課の直通電話に次川

員に二名島バッテリ あると言ったそうですね」 「新庄さん、あなたは電話に出たうちの社 の株のことで相談が

わりはどうされますか」と次川に聞いた。 「頼む。新庄さん、あなたはどうされま 次川はそう言って白ワインを呑みほした すかさずウェイターがやってきて「お代

「それ、いくらですか」

ルクルーゼの鍋を交互に指さした。 新庄はワイングラスとムール貝が入った

Shibuya Kazuhiro 作家・経済ジャーナリスト 大正大学表現学部客員教授。 1959年12月、横浜生まれ。 日経BP社で「日経ビジネス」副編集長、「日経ビジネスアソシエ」創刊編集長、 「日経ビジネス」発行人などを務めた後、 2014年3月末、独立。 1997年に長編ミステリー 『銹色(さびいろ)の警鐘』(中央公論新社)で作家デビュー。 TV、ラジオでコメンテーター、MCも務める。

次川は苦笑した。

いのでね」 「いくらだったかな。値段はほとんど見な

百円になります」 「ムール貝とグラスワインのセットで五千

「ホットコーヒーください」

告げた。 テーブルから離れるのを待って、ヴィンセ ント・ファンドが取得した二名島バッテリ ・の株を伊予南市で買い取りたいと小声で 新庄はわるびれずに言い、 ウェイターが

「ほう……」

「お話、詳しく聞かせてもらいましょうか」 次川の表情に好奇心の光が灯った。

> **馬鹿者を** 石打悠太